

## 学校の主役は子ども達

城間 剛

### 1 A小学校との関係作り

#### (1) 一地域住民として

A小学校は私の母校です。卒業したのは1979年ですから、ずいぶん時がたっています。大学卒業後会社勤めが始まりA小学校は目にすることはあってもただそこにあるだけの存在でした。そのような私が学校の飼育小屋に興味を向けるようになったのは妻の赴任先の小学校から子うさぎをもらった8年前からです。それまでわが家にはペットはおらず、初めてのうさぎに夫婦で家族の一員として接し、楽しみながらもその生態や行動の不思議な魅力に取り付かれてしまいました。

それまでA小学校は選挙をする場所程度であったが、うさぎがわが家に来てからは飼育小屋が目がいくようになりました。しかしその状態は悲惨で悲劇的なものでした。その当時私たちがまだまだ勉強不足の私たちから見てもとても厳しい飼育状態でした。「この状況を何とかできないか」これがA小学校の飼育小屋との関わりのスタートでした。ただ、この時はうさぎだけに視点がいき、子ども達や教職員の方々へのアプローチはほとんど考えてはいませんでした。

それからは、週末時間があるたびに夫婦で飼育小屋に行きペレットをあげたり、空っぽの水入れに水を入れたりなどの行動をとっていました。しかし抜本的な解決方法が見えないまま時間が過ぎていました。「ああ、この学校のPTAならばいろいろな取り組みや仲間を増やせるのに」といつも不満が多かった時期でした。

#### (2) 小学校にかかわれる人となって

私の行動の転機になったのは今から3年前、市の教育研究所に小学校のパソコン授業の指導員としての採用されたことでした。

研究所はA小学校の空き教室に設置されており、出勤等でA小学校へのかかわりが生まれました。少しずつではありますが、教職員の方々に飼育の仕方を話す機会を得ました。そして私の担当する小学校2校の飼育小屋に関われる環境が出来たことで、私は「うさぎのための場所」という考え方から、学校の中で子ども達と接する中で飼育小屋は子ども達が命をより身近に感

じられる場所でなくてはならないと考えるようになり、「子ども達のための場所」へするための取り組みが大事なのではないかと方向転換することが出来ました。

#### (3) 子どもたちの変化

指導員として配置後間もなく2校の教頭先生に許可を頂いて、掃除やお世話を飼育委員の子どもたちと一緒にやるようにしました。うさぎはどんな動物なのか、食べ物について、清掃方法について、出産について、子どもたちから出てくるたくさんの疑問に答えていく過程の中で多くの飼育書と出会い私自身多くを学ぶことができました。

「糞(ふん)の掃除が嫌で行きたくないけどで委員会活動だから仕方なくやる」場所からだんだん担当日以外でも飼育委員が顔を出し、友達も呼び、楽しい声が響く場所へと変化していききました。そうすると他の学年の子どもたちも集まりそして動物たちに対して興味を持つ子が増えてきました。生まれた子うさぎを里親に出す計画も認めていただき、校内へ募集ポスターを張ると図書館からうさぎの飼育に関する本がどんどん借りられていきました。応募多数の中から8名の里親が決まり親子で引き取りにきてもらい同時に数人の先生方も里親になってもらえたのはとても印象的でした。この時初めて獣医師の先生にコンタクトを取り、支援をしていただき、専門家が隣にいる心強さを感じることができました。この小学校は私がいる間で雄のうさぎを里親を探すことができ、昨年度から雌うさぎが5匹でのんびり暮らしています。

#### (4) 地域活動への関わり

この指導員時代に学んだ事に小学校とかかわるためには地域活動、特に子ども関係の活動へ積極的にかかわり、「安全な人」というお墨付が必要ということが分かりました。もともとボーイスカウト活動やレクリエーション活動をしており、子どもと活動することは大好きなので昨年度からは文科省の子どもの居場所作りや市の保育支援事業などへ積極的にかかわるようにはしました。その流れでA小学校の読み聞かせボランティアにも参加をし、学校との接点を作ることに成功しました。

## 2 A小学校の飼育小屋の環境改善

### (1) ゴールデンウィークの掃除

読み聞かせボランティアとして半年が経ち新しい管理職にも顔を覚えていただいた今年のゴールデンウィーク前にその期間中の掃除のボランティアを申し出、快諾していただきました。飼育環境は芳しくなく、管理職の方もその対応に苦慮しておられたので、先の学校でお世話になった獣医師の方から対応方法について指導を受けてみないか提案したところ承諾がもらえたので後日飼育小屋の中でお話を聞いてもらう事が出来ました。そして別のタイミングでは子どもの居場所作りで関係が出来ていたPTA会長にも現状把握をしてもらい、ついに5月のPTA作業に飼育小屋の環境改善が正式なメニューとして取り組んでもらえたのです。

私が一貫して管理職の方や先生方、PTA役員や保護者の方に「飼育小屋は子どもたちにとって命にふれあえる場所です。子どもたちが安心して動物とふれあうために、衛生的で安全な場所にしてほしいのです。そのためにはPTAの皆さんの中に私のような地域のボランティアも微力ではありますが一緒に活動させていただくことで地域の宝である子ども達の育成に関与させて貰えればこんなに嬉しいことはありません」と訴え続けたのです。

### (2) 現在のA小学校の飼育小屋

このPTA作業後、小屋内の土の撤去、うさぎたちの去勢避妊手術、うさぎたちの健康改善、小屋へのコンクリート打ち（子どもたちも多く参加）、にわたりの部屋の確保と多くの改善が進みました。この2ヶ月半の間、我が家では親うさぎ9匹、子うさぎ16匹を預かり、日々の世話や掃除そして看護、里親探し等できる限りのことをしました。



そして7月中旬にはA小学校にまたうさぎ達を戻しました。その後飼育委員会の6年生たちがお世話を再開しています。

この活動は沖縄タイムス社の特集「命を学ぶ 学校飼育の現場から 劣悪環境を変える(2006年6月13日朝刊)」に掲載され多くの方が興味関心を持ったと聞いています。

### 3 これからの取り組み

学校の主役は子どもたちです。子どもたちが学校にいる飼育動物に愛情を注ぎ、同じ地球上に生きている仲間であることを知るとき、学校だけでなく自宅や近所にいる動物たちにも愛着を持ち、遺棄することを良しとしない社会環境の醸成に寄与することと信じています。

沖縄県は全国でも犬や猫の処分頭数も多く、飼い主のモラルの低くさが危ぐされています。山林等へ遺棄された結果、希少生物の生態系へも深刻な影響が懸念されているとも聞いています。

学校における飼育動物の存在は単純に学習教材としてではなく、命の大事さ・温かさ・尊厳を教えてもらえる生あるものとして子ども達の未来に少なからず良い影響を与えると信じてます。

私は地域住民として、これからも市域の幼稚園・小学校で出来るだけの飼育動物の飼育環境の改善に携わって行きたいと考えています。その際にはPTAの皆さんと連携し、地域の獣医師さんから指導援助を受け、息の長い活動が実施できるようあせらず取り組んでいきたいです。

(沖縄県 会社員)

